「土地の潜像」

潜像という言葉があります。
これは表面からは見えないが存在している像、つまりイメージということです。私たちの接する土地はいくつものレイヤー（層）によって構成されているのではないでしょうか。

もちろん目の前に見ている私たちの街は、豊富な情報を含み現実のものとして私たちは生きています。しかし、その下には、積層されたいくつもの情報が潜んでいるように思えます。
本展覧会では、土地に関心のある 3 人の美術作家が集まり、隠された層に注目した展示とフィールドサーベイの経過発表を行います。

隠されたイメージとは、身近なことで言うならその場所（土地）の早朝の様子、昼間の様子、夕方の様子、真夜中の様子でも相当違うはずです。あるいは、もっと長い時間の感覚なら、かつてそこはマントルの中であったり、海の底であったり、あるいは川や岬、山であったりなど地学的な状態の変化も存在するでしょう。
本展覧会が開催される「天神山文化プラザ」はかつては天神、つまり神を祀る場所で岬のような場所でした。あるいは温暖な時期であれば海の底だったかもしれません。今はたまたま地上に出て、少し高い小さな丘、あるいは島という見え方をしています。遠い未来ではまた海に沈むこともあるかもしれません。

本展は、土地にまつわる 3 つの展覧会で構成され、今回は 2 つ目の展示です。
昨年は、「土地の声」展、今回が「土地の潜像」展、来年度が「土地の現像」展です。3 つの展示を積み重ねることで、より大きな言葉を編むことができるのではないかと考えています。
今回は 3 人の作家が、それぞれの土地の持つ層、つまり潜像を見つめた作品を展示します。

チームmoon について

2019 年、岡山在住の異なるアートジャンル作家たちが、現代社会やアートに関する問題意識を探り、わかりにくいと言われる現代美術を噛み砕きながら、地域の方々と共に考え、発信していこうと集結し、アート制作発表グループ moon を結成。当初メンバーであるサトウリツコ、岡部玄、近藤千晶、松本恭吾に、岡山に関わりのある作家岩崎正嗣、大橋裕子、谷徹を加え、天神山文化プラザで「二つの円環」展、「アートの手触り」展、「濃厚接触」展、「土地の声」展を企画開催している。

特に近年は、場からエネルギーを得て制作する作品と、研究を中心に活動している。

「土地の記憶帳 2　倉安川・吉井水門」 2026 年　キャンバスに写真転写、コラージュ、アクリル加筆　他

美術作家

近藤 千晶

暗室で写真を現像した経験がある。赤光の下、印画紙を現像液の中で揺らしていると、隠れていた潜像が浮かび上がる。ぼんやりとした影が揺れ、現れ始めた輪郭が唐突に像を結び、記憶が掬い取られる瞬間を息を凝らして見つめていた。

バイパスを走る車窓から見下ろす起伏の少ない平野には、その昔遠浅の海が広がっていたらしい。夕闇に沈む家々に ぽつりぽつりと灯りが点り始める。干拓のため造られこの地に残された古い灌漑遺構を、どのように表現したら記憶の淵から掬い上げることができるのか考えていた。

[こんどう ちあき]
2001,2007 個展 村松画廊（東京）
2005 個展 位置や時間や光について 奈義町現代美術館（岡山）
2012,' 15,' 16,' 17,' 18,' 19,' 24 個展 MATSUO MEGUMI +VOICE GALLERY pfs/w（京都）
2021 二つの円環 天神山文化プラザ（岡山）
2022 アートの手触り 天神山文化プラザ（岡山）
2023 濃厚接触 天神山文化プラザ（岡山）
2023,2024 AKAP (安曇野市 × 京都芸術大学連携アートプロジェクト) （長野）
2025 土地の声 天神山文化プラザ（岡山）

「潜像 -2」(部分)2026 年
1,167×803mm/ 和紙、墨、胡粉、岩絵具、銀箔

画家

大橋 裕子

家の前ではいま黄金色の稲穂が風に揺れている。少し歩けば、5 〜 6 千年前の縄文土器が発掘された遺跡が佇んでいる。命の水が沸き出た数々の井戸にも出会える。かつてこの一帯は海岸線に近く、辿り着いた山の水が大地を潤し、人々の営みを静かに支えてきた。手漉き和紙を育んだ水の恵み、農耕、瀬戸内海がもたらした漁業や船の往来による文化交流 – そのすべてがこの土地の時間を重ねてきた。
旭川の流れと瀬戸内海の気配が重なる場所に暮らしていると、日々の生活は長い歴史の積み重ねの上に成り立っているのだと気づかされる。一粒の種、まだ見ぬ無数の生命が連綿と命をつないできた、その静かな連鎖。私はその気配である「土地の潜像」に耳を澄ませ、やがて立ち現れる像として制作の中に映し出そうと試みている。

[おおはし ゆうこ]
2021 倉敷芸術科学大学大学院 博士後期課程修了
2023 同大学院 日本画特別研究生修了
岡山県美術展覧会洋画部門 招待
中国デザイン専門学校 非常勤講師

「座る人の観察　（仮設の椅子）」　ベーグラードの路上

美術作家

松本 恭吾

人々の路上の振る舞いに興味がある。特に自分なりのやり方で、路上で過ごしたり、路上を使ったりする人々が面白いと思う。「自分たちは都市を所有している」という感覚は大事だと感じている。日常の中での人々の自由な行為の発見と観察を重要視している。

都市（街や郊外）は幾つものレイヤーが重層的に重なり構成されていると思う。路上で過ごす人も、場を構成するレイヤーのひとつだ。私の制作は、その層の発見であったり、その層の新しい使い方の提案だったり、より大きくみんながそこで楽しめたりするよう状況を整えることにある。世界には沢山の見えない何かが隠されている、そんな感覚が私の制作の出発点になっている。世界にある層をひとつひとつ丁寧に剥がしていくことが私の役割だと思い制作している。

[まつもと きょうご]
2002 年 倉敷芸術科学大学大学院修士課程修了
色々な土地に行き、都市空間をターゲットに制作